

上川地区社会科教育連盟研究大会 研究協議記録

平成 18 年 11 月 1 日

記録 士別南中学校 松原 昌平先生

- Q 政府がなかったら、どうなるかという発問は、視点の転換と考えられるが、ほかに視点の転換として考えられる部分はないのか。また、税金についての話は、次の時間への布石として考えているのか
- A 政府がなかったらという発問をしたほうが、かえって子どもたちも政府の重要性について理解しやすいと考えた。視点の転換として他には特に用意はしていない。税金については、次の時間に扱う累進課税制度へのフォローである。弱者保護の視点から次の時間税金についての理解を深めたい。
- Q なぜ、よい点、悪い点という二つの発問という形になったのか
また、生徒にどのような答えを期待していたのか
- A 政府が無くては困るという点について考えて欲しかった。授業前は、現在の社会情勢から、生徒が政府に対して不信認識を持っていると予想したが、実際には、さほどでもなかった。生徒への期待としては、とりあえず財とサービスという部分が抑えられればよい。
- O p 政府がなくてよいかという投げかけは、必要か。政府があつて良い部分を多く押さえたほうがよいのではないか。
- A 本当に政府が無くてよいか、という投げかけが必要と判断した。そのほうが、政府のありがたみを感じ取れると思う。
- O p 一人一人が付箋に意見を書くのであれば、全員の付箋を黒板に張り出したかった。一人一人の意見を前面に押し出せる授業構成のほうがよいのではないか。
- A 時間配分について検討していきたい。
- Q 生徒の実態として、知識・理解が低いという押さえをしているのだから、その部分を伸ばす手立てを考えるべき。興味・関心はすでに高いのだから、知識・理解を伸ばす授業構成をするべきだ。南中の教材教具の工夫により、興味・関心を伸ばすという目的には、合致しているようだが・・・

- A 今後、知識・理解を伸ばすと言うことを考えて、本時は関心意欲を喚起することとした。知識・理解は単元全体を通して伸ばしたい。
- O p (授業検討では) 財政の三つの役割をしっかりと身につけるために、具体的事例を通して3時間で全体をまなぶというユニット式にした。指導案には、知識・理解を重点的に伸ばすということはおかれていないが、三時間をトータルで見た時に、重点は、知識・理解を伸ばすことにある。
- Q 指導案には、三者の関係として具体例を考え、すべてが埋められなくてもよいとあるが、それで三者の関係を正しく理解することができるのか。
- A 公共的事例をもっと想起させるべきだった。生徒からの発言として公共的事業と一般企業の場合として二つの意見が出たが、もっと公共事業から出すべきだったと反省している。生徒の考えた三者の関係は、厳密でない点もあったと思うが、三者の関わりをある程度生徒が押さえることができればよい。
- O p 三者の関係の中で、どのような関係について考えればよいのか、子どもたちが悩んでいた。本時で関係のない矢印は消すなどしてもよかったのではないかと。
- A 最初は、矢印の部分に書き込みを行う予定であったが、上位の子どもしかできない。当てはまる矢印に丸をつけるほうがよいと判断した。
- O p あの図は整理されすぎているので、全部事例で授業を展開し、最後に整理された図を提示したほうがよいと思う。
- Q 財・サービスという押さえが不十分ではないか
- Q 評価について書き方のニュアンスが異なるのではないかと。
- A いきなり三者の関係を黒板に貼り出さずに、財とサービスの関係について、先に説明すべきだったかもしれない。
- A 二時間目で、今日の内容を押さえつつ、本時の評価も次時に行いたい。
- O p 三者の関係について、学習した後に一般企業を想起して、付箋をつかった授業を行ったほうがよいのではないかと。既習事項としていかせるのではないかと。

O p 政府・企業の関係を考える際に、この関係を教科書などで学習する前に、政府・企業の関係の具体例を考えるのは難しいのではないか。

A 実践してみたいと思います。

O p 教科書の説明は、次第に簡略化されている。教科書を読むだけでは、ないよう理解ができないという前提で教師は指導を進めるべきだと思う。

A 考慮に入れます。

Q 政府があったほうがいいこと、政府がないといいことを考えよう。という発問は、「もし」という発問であり、メリット・デメリットを考えるというものである。これは、発問の意図が二つあるというになり、難しいのではないか。

A 発問の意図は、二つではなく一つのつもりである。意図としては、政府がなかった場合、あった場合のそれぞれのメリットを考え、政府が存在する意義について考えさせるというものである。

助言

工藤雅人 指導主事より

子どもの意欲の喚起について、まず授業を成立させることが肝心である。さらに、特別活動における望ましい集団の中で授業を行いたいという自主的・自発的行動も必要である。以上の上に、教科活動への関心が成立する。

生徒は、教師のねらいを非常に気にしており、教師としては授業の狙いを明確にし、発問などの吟味を行わなければならない。

笠井 正彰 校長より

生徒の意欲の高さ、生徒とのコミュニケーションの多さ、生徒の発言に対する教師のかわしのうまさに感心した。税金について触れるのであれば、中学生にかかる義務教育費などについて触れてもよかったのではないか。また、政府がなかったらよい点はなにかという、普通しない発問をし、生徒の考えを深めさせた点はよかったのではないか。